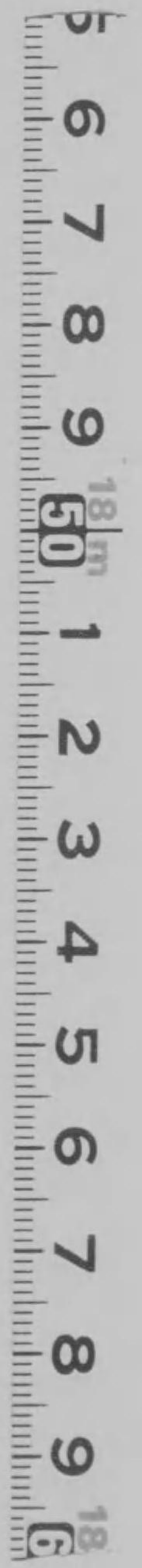


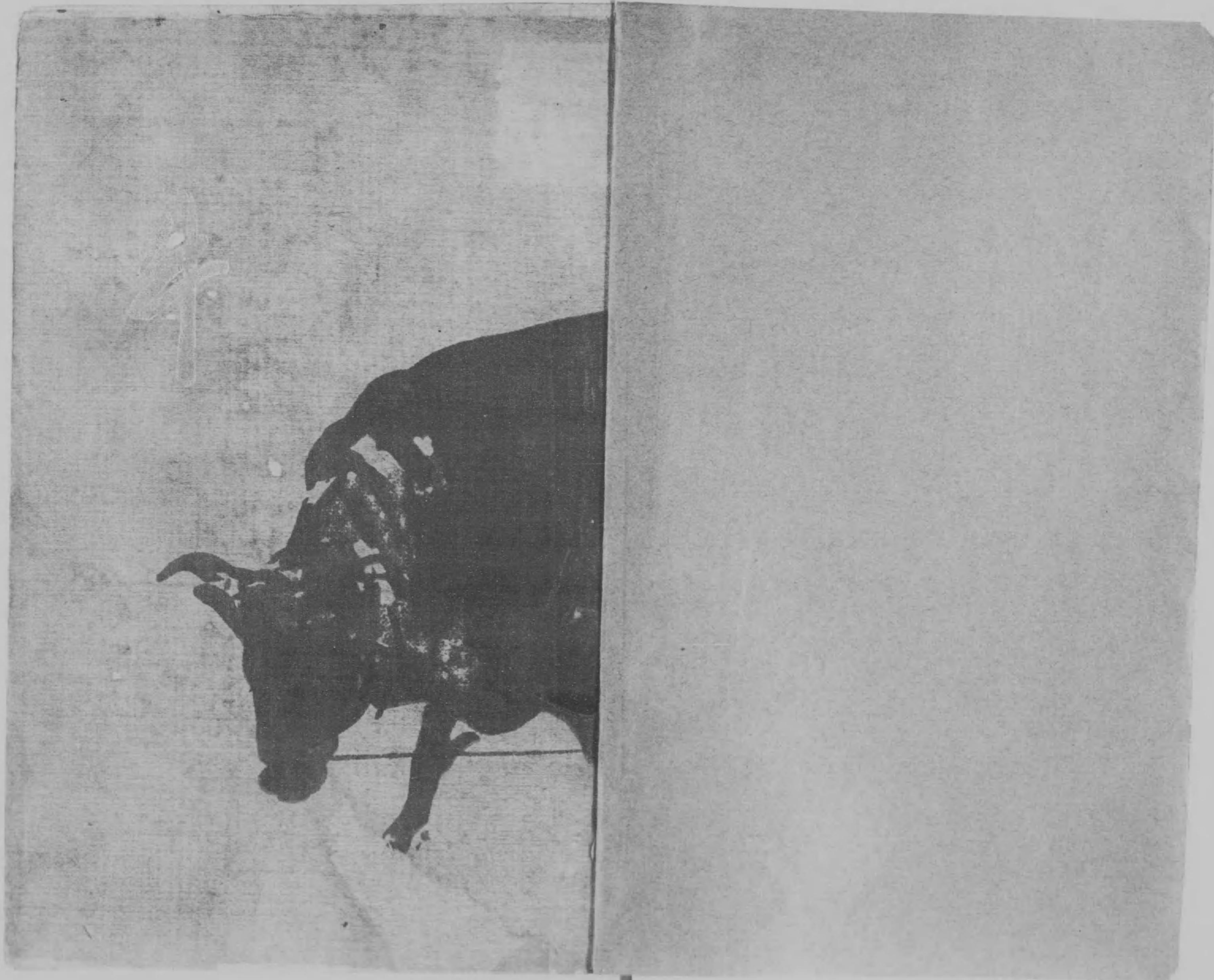
360
1061



始



14.9.25

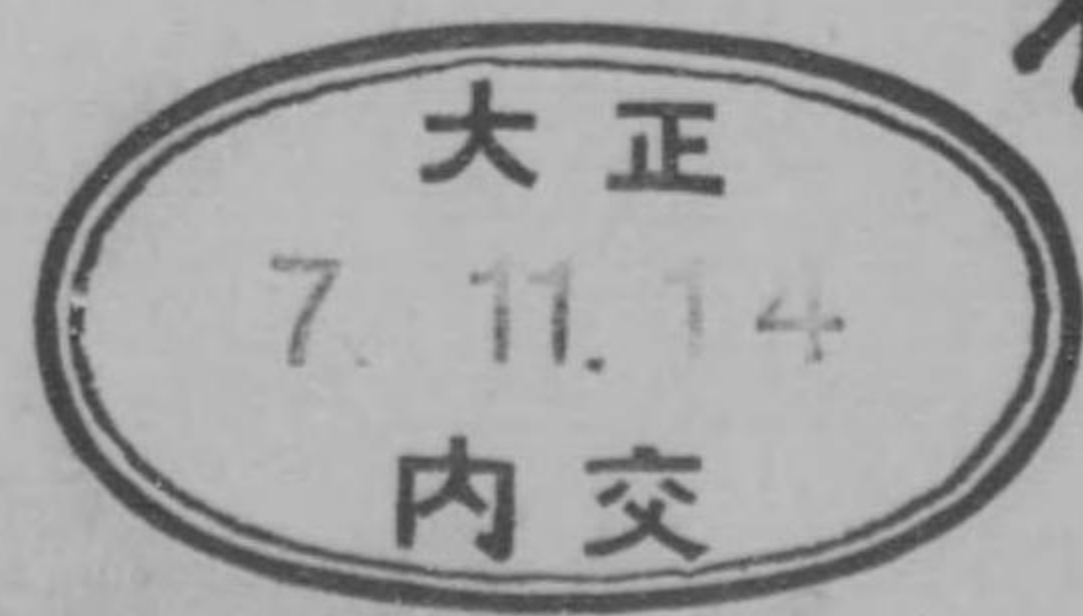


卷之三
目錄

360-106₁



玄年水心著



緒言

我肉體は土より

我靈は神より出づ

少時此の世といふ宿屋に逗留して

働きつゝ向上し

向上しつゝ働

得たるところのものを擧げて

此の世といふ宿屋に茶代として置き

彼の世に旅立つ時には

我肉體は土に

我靈は神に歸る

旅は道連れ世は情

逗留中は感謝の外何物もなし

随つて此の書元より我失意を託たんとに非ず

また我得意を誇らんとにも非ず

唯己が過去の過失を省みつゝ

聽て牽かれて善光寺へ参りたさに

自らもとめて得たる一匹の牛而已

大正四年春

著者

謗者任汝謗

嗤者任汝嗤

天公本知我

不覺他人知

象山

Here on earth we are as soldiers, fighting in a foreign land, that understand not the plan of the campaign, and have no need to understand it; seeing well what is at our hand to be done. Let us do it like soldiers, with submission, with courage, with a heroic joy. Behind us, behind each one of us, lie six thousand years of human effort, human conquest: before us is the boundless Time, with its as yet uncreated and unconquered continents and Eldorados, which we, even we, have to conquer, to create; and from the bosom of Eternity there shine for us celestial guiding stars.

THOMAS CARLYLE

強惡能扶功業來



大老

鐵燕外史



敬請
木

裝畫は 木鳴櫻谷先生

口繪は 富岡鐵齋先生

作歌は 湯淺半月先生

作曲は 米野鹿之助先生

茲に謹んで感謝す

著者

目次

✓著者の身の上……………一

三教師五科目……………七

✓卒業證書……………一五

✓母の愛……………二二

✓出發點……………二九

✓貧兒の幸福……………三五

日米富豪の子弟……………四一

✓労働は神聖なり……………五一

1
目次

2

孝と成功……………五九

故ジエイ、ピイ、モーガンの應接振……………六七

カーネイギの光風霽月……………七三

鐵齋畫伯の詩……………七九

コネディカット沿岸の魚釣會……………八五

心の快び……………九三

奴隸と奴隸……………一〇一

意志の獨立……………一〇七

亡國の兆……………一一三

三根性……………一二三

3

最も有効なる健康法……………二二九

寺院と動物園……………二三五

阪神電車の揭示……………二四二

華嚴の瀧と一粒の米……………二四九

初夢……………二五七

嘘ならざれば通れぬ關所……………二六三

手品師中の手品師……………二七一

運動屋……………二七五

取締役監査役……………二八一

千手觀音……………二八五

4

人と交るの秘訣……………一九一

吾輩は教育家なり……………一九七

習字と體操……………二〇三

建築と趣味……………二〇九

一言一行と人格……………二一五

商品の粗製と人間の濫造……………二二二

榮螺と鎖國……………二二五

別荘と旅行……………二三三

京都の蛙と大阪の蛙……………二三九

日米の國交……………二四五

5

品性の揭示場……………二五一

此の世の宿帳……………二五七

晴天三日間……………二六三

＜COWARD＞と陰口……………二六七

十九年間一千萬圓……………二七三

航海の妙趣……………二七七

人と土……………二八三

海外發展十二言……………二九一

養子と養家……………二九七

三十六ヶ條の内三十五ヶ條……………三〇三

6

✓ 柳の枝の蛙……………三〇八

✓ 失望と感謝……………三二五

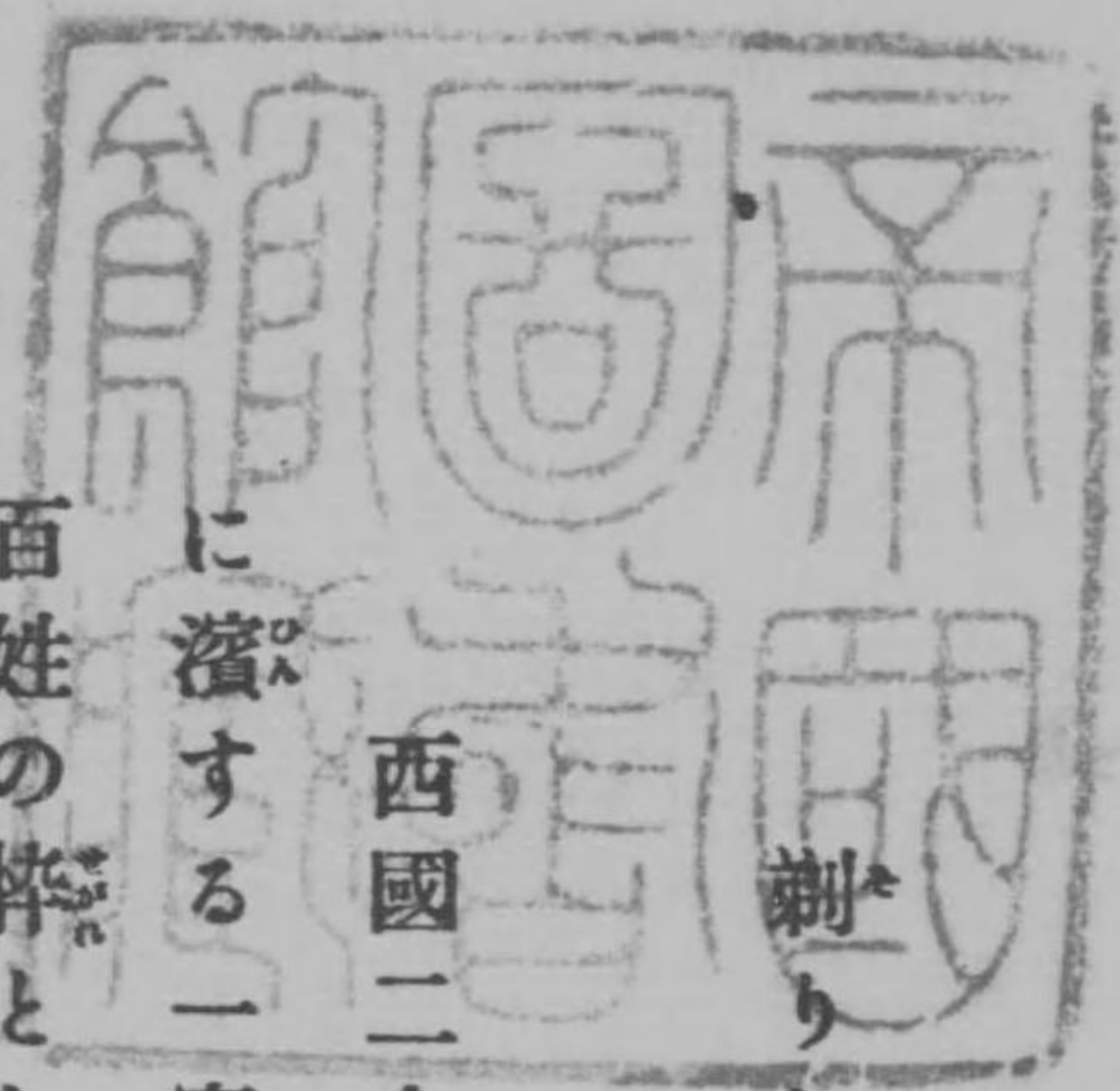
後醍醐天皇と順徳上皇……………三三二

✓ 著者の見る神……………三三七

✓ 我旅の道づれ……………三三七

目次終

著者の身の上



剃りたきは心の中の亂れ髪

頭の髪は兎にも角にも

西國二十五番の札所、清水山の麓、東條川の翠溪
に濱する一寒村—兵庫縣加東郡上東條村—に、貧しき、

百姓の悴として、産ぶの聲を擧げてより、十六の春ま

では、村の小學校に通ふ片手間に、晝は山に刈り、夜

は家に、村童を集めて、一小塾を開けり

卒業の後は、小學校に、見習として教鞭を執り、

著者の身の上

只管、師範學校に入るの準備に餘念なかりき
人多き人の中にも人ぞなき

人になれ人ひとになせ人

その頃、余の切なる希望は、人を教ふる教育家たらんと欲するに在りき、そは教育のこと程、偉大にして、神聖なるものはあらしと、幼な心にも、深く感じたるが故なり

わけ登る麓の道は多けれど

同じ高嶺の月を見るかな

畦より行くも、田より行くもと、余は老いたる父

の爲、母の爲、將た幼き弟の爲、境遇のまにまに、泣く泣く、己れの希望を棄て、端なくも物質界に入れり

破山中賊易

破心中賊難

王陽明

あはれ、朱に交りて赤く、竟に俗物と化せんとす、去り乍ら、山河は改め易く、本性は移し難しとかや、若き師匠たりし昔の記憶こそ、今も尙、いと懐かしき極みなれ

著者の、筆を手にする柄に非ざるは固より、十露盤彈くに急がはしき身の、何の因果か、烏澁がましく

も、今年元旦、後前の分別もなく、想ひ付きてより、
 未だ月餘ならず、南船北馬、席の暖まる暇さへなきに、
 少閑を偷みて、爰に脱したるこの稿の、如何に杜撰に
 して、如何に不親切なるやはいはずもがな、破鍋に綴
 蓋、さながら著者の日常もかくこそ

ふまれても根づよくしのべ道芝の

やがて花さく春は來ぬべし

三教師五科目

英國の經濟學者ジョンステュワートミルは、「格言は千古を通じて不易なり」といひ、近世哲學の泰斗ロドベイコンは、「格言中に含める及物を以て、人事のあらゆる難關を切り開け」と教へ、ベイコンの最も崇敬したる、羅馬の哲學者シセロは、「格言中より鹽を探りて、己れの欲する所に、之を撒き散らせ」と誨へたり

凡そ世の中に、格言ほど、嚙みしむればしむるほ

ど、味の出づるものはなかるべし、就中、「宇宙は大學校なり」との格言に至りては、殆んど天下の妙味を竭し得て、餘す所なきが如し

降る雪、出でたる月、隠れたる星、咲く花、落つる木の葉、甘きに集まる蟻、蜜をつくる蜂、巢を營む蜘蛛、さては柳の枝に飛び付く蛙、軒石に穴を穿つ雨滴、何れ一として、動かすべからざる眞理と、教訓とを與へざるはなし

人あり、嘗て英國の物理學者ニュウトンに向ひ、如何にしてかくの如き、大發明をなし得しかを問ひた

るに、彼は「只常に思ふて止まざりし故なり」と答へたりと、蓋し宇宙の大学生は、己れの欲する所のものに向つて、常に念ふと念はざるとによりて、得ると得ざるとの別を見るなり、古聖誠めて曰く「神は自ら助くる者のみを助く」と

宇宙の大學校に三教師あり、其の一を艱難、其の二を経験、而して其の三を吾敵とす、語にも「逆境は人を作り、艱難は爾を玉にす」「経験なき學問は、學問きな經驗に如かず」或は「爾の腕を磨くものは、爾の味方に非ずして、爾の敵なり」と

世の中は、眼あき千人、盲千人、人事必ず何等かの障害に遭遇するものなり、されど蒼穹にかゝれる月の光よりも、雲間より漏れ出る月の、遙かに研やけきに非ずや

Every cloud has a silver lining. MILTON

「失敗に同情、成功に敵」或は「疾風勁草を知り、喬木風強し」の言また味ふべし

己れの従事せる業務の如何を問はず、宇宙の大學生たらんものの、須く學ばざるべからざる科目五あり、
一に信仰 Faith 二に悔悟 Repentance 三に博愛 Love 四

に感謝 Thanksgiving 五に犠牲 Sacrifice なりとす

ゲイテ曰く「信仰はあらゆる知識の極度にして、端緒に非ず」と、而して孔夫子は「過則勿憚改」と教

ふ、一樹の蔭、一河の流も他生の縁、一茶の句に

我れと来て遊べや親のない雀

相愛せんか、針の目も廣く、相憎まんか、天も地も狭かるべし

人をみな吉野の山の花と見よ

われを難波のあしといふとも

陶淵明は言へり、「夫の天命を樂んで復た笑ぞ疑はん」

14 14
や と、 一本の蠟燭も、 我身を盡して、 他を照らすに非ず

卒業證書

西諺に曰く、「明日死ぬ積にて今日生きよ、永久に
生くる積にて今日學べ」と、宇宙の大學校には、卒業
てふことあることなし

一定の期間、一定の學校に通ひて、一定の科目を
修め、將に社會に出でんとするや、其の門出の贖とし
て、之に卒業證書と名づくる、一葉の印刷物を與ふる
の習慣あり、享くる者、動もすれば、その證書の眞意
を誤解し、之を得ては、恰かも鬼の首にても、取り得



たらんかの如くに思惟し、端なくも慢心を起して、將來を過るものなきにしも非ず

世間の所謂學校は、社會即ち宇宙の大學校に入るの豫備校に過ぎず、随つて卒業證書は、社會への入場券たる而已、眞の學問は、寧ろ學校を出づると同時に、始まるべきもの、水を涉りて、その深さを知るべし、ダウエンポートは、「教育の最も大切なる任務は、自己に對し、國家に對する、人の自負心を殺すことなり」といへり、世の父兄、學校長、或は何々學校卒業を鼻にかくる人、以て如何となすか

試みに、卒業證書に代ふるに、左の如き印刷物を以てせば如何に

社會へノ入場券

何 某

右者、本校ニ於テ、何年間所定ノ學科目ヲ學習シ、初メテ己レノ如何ニ愚ニシテ、如何ニ何事ヲモ識ラザルカヲ悟ルト同時ニ、社會へ入ルコトノ過分ノ仕合ヲ感謝シ、更ニ左ノ六箇條ヲ眷々服膺センコトヲ誓ヒタルニ依リ、




卒業證書

此ノ券ヲ授與ス

- 一、 學校出身者タルコトヲ鼻ニカケザルコト
- 二、 如何ナル勞働ヲモ辭セザルコト
- 三、 如何ナル困難ニモ屈セザルコト
- 四、 人ニモ事ニモ親切ヲ旨トスルコト
- 五、 夢ニモ虚言ヲ吐カザルコト
- 六、 一切人ニ迷惑ヲ掛ケザルコト

年月日

何々學校長 

母の愛

光格天皇の御製に

這へば立て立てば歩めと急ぐなり

わが身につもる老をわすれて

ジョン ラスキンは、「人の目を樂ましむるものは、蒼穹に如かず」と、而して心の眼に、最も美はしく映ずるものは母の愛乎

嗚々の聲をあげてより、女なるがゆるに、入りては謙遜出でては辭讓、男の粗暴なるにも似ず、從順

克く父母に孝に、兄弟に友に、嫁しては夫に和し、舅姑、小舅姑に事へ、常に己れを犠牲として、夢にも、功名の奴隷たることなし

小さき胸を痛めつ、漸く調へたる三度の食膳も、間々小言を以て迎へらる、世の男子、試みに片時にて、女の身となりて見よ

一抱あれど柳は柳かな

千代

男子は外に出でて、變化ある人生を送り得れども、婦人は内に在りて、變化なき生活を營まざるを得ず、男子に道ならぬ行ありとも、之を咎めんとはせず、克

く忍び、克く守り、眼中、ただ家あり、舅姑あり、夫あり、子ありて、己れなきものの如し

身もし妊みたらんか、行住坐臥、胎兒の爲に、己れの自由を束縛せられ、命を的に分娩を了れば、嬰兒の養育に、我を忘れて、日夜心を千々に碎く、句に

親も子も泣くや霜夜の乳貰ひ

子もし病まんか、父は眠ることをすれども、母は然らず、不眠不食、看病に當る、焼野の雉子、夜の鶴、何れか我子を思はざる、中納言兼輔の歌に

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道にまよひぬるかな

と、~~母の~~句にも

~~母の~~句に非ず負ひ其の句と

とんぼつりけふは何處まで行つたやら

若し夫れ、母の、己れの凡べてを犠牲として、犠

牲となせることを、知らざるに至りては、血あるもの

誰か、萬斛の涙なからんや、げに母は犠牲と愛との化

身なり

試みに、世の中より、母の愛を取除かんか、果し

て何物か残る、而して母の愛を、しかく重く思はざる

は、畢竟、母の愛の、宏大無邊なる所以乎、愛に母の

愛ほど全きものなく、犠牲に母の犠牲ほど尊きはなかるべし

世の人、忘るゝ勿れ、古來今往の偉人の多くが

母によりて出されたることを、而してカーライル、ピ

スマーク、リンコーン、ナポレオン、秀吉等の偉人

傑士が、如何にまた其の母を思ひしかを

尊重せよ 母の愛

自重せよ 世の母

出
發
點

23



母
の
受

一滴の雨、落ちて山巔の一礫にあたり、碎けて分れ、一は礫の北に、一は南に、相距ること忽ちにして十歩、而して更に百歩、やがて一は南麓に、一は北麓に、實に流水ゆきて歸らず、未だ日ならずして、一は北洋に、一は南洋に、注いで永へに相別る、人生の行路や、またこの類乎

31
天は、辿る行路を、全く人に任せおきて、各をして各の運命を掌らしむ、而して人の運命は、その出發

點に於て、定まるものには非ざる乎、基督は曰く「叩けば門は開かれ、求むれば與へらる」と、世の青年、己れの力にて敢て何事かを、成さんともせず、滔々として、難きを避け、易きに就かんと欲するは、人生の首途に於て、自ら鶏口たらんことを避け、牛後たらんことを欲するものに非ずして何ぞや

若し一年の計にして元旦にありとせば、一生の計は、正にその出發點にあり、西諺に“Nothing dared nothing gained”と、虎穴に入らずんば、虎兒を得ずとの謂乎、その出發點に於て、一たび苦を避け、樂を求めて

牛後たらんか、果して、何れの時にか、雞口たることを得ん、況んや牛頭たることをや

一里の差は、千里の失となる、出發點に於て、心して定めざるべからざるは方向なり、而して茲に、特に言はんと欲するは、方向一たび定まらんか、鐵椎の氣根を提げ、奮然として出發すべし、といふことなり、何をか鐵椎の氣根といふ、敢爲の度量 Daring power と獨創力 Initiative power 即ち是なり、この二力を兩翼として、勇往邁進せんか、萬里の鵬程も悠揚として、わたり得べく、天下亦何物乎、克く之を阻止せん、性相近し、

習相遠し

冀くば、徒に逡巡して、カーライルの所謂、「人生
は躊躇なり」に終らざらんことを

一筋にこころ定めよ濱千鳥

いづくの浦も波風ぞ立つ

貧兒の幸福

植ゑて見よ花の育たぬ里もなし

心からこそ身は賤しけれ

快男兒カーネイギ、嘗て成功の秘訣を人に語り、
「人生の行路に上るや、その身先づ貧家に生るゝを以
て、最要とす、何となれば、貧兒の英氣、聽て是れ成
功の原動力なればなり」と

起きて働く果報者、凡そ世に、貧兒ほど、幸福な
るはなかるべし、涇一本、腕一本の外、手足に纏ふも

のなきは、やがて、此の世の旅を身輕にせよ、と特に
寄せたる神の同情乎、然るに憐むべし、富家の子弟は、
遺産相續てふ名の下に、金銭財寶、田甫山林、其の他
多くの重荷を、身に纏ひ、却て此の世の旅を、益々難
澁ならしめつゝあるに非ずや

天道私なし、常に善人に與みず、貧兒は、幼少の
頃より、星に起き、月に臥し、梅風沐雨、具さに艱苦
を嘗めれば、此の世の旅に、つゆ不自由を覺ゆるこ
となきは固より、不平もなく、失望もなし

夫れ、隠れたる信あれば、顯れたる感あり、財を

積む千萬、薄藝身にあるに如かず、努力せよ世の貧兒、
鐵心石腸、よし杖に縋るとも、夢、人に縋るなかれ、
幽谷を出でて、而して喬木に移れ、男子の本領、正に
全力を注ぐにあり

泣いて生れ、不平で暮し、失望で死ぬ、とは、蓋
し富家の子弟に與へたる語乎、さても幸福なる世の貧
兒よ、見ずや、天の、卿等に與へたる洋々たる前途を

士別三日 即當刮目相待 非復吳下阿蒙

抄

日米富豪の子弟

40



貧兒の幸福

五陵年少金市東 銀鞍白馬度春風

落花踏盡遊何處 喚入胡姬酒肆中

李太白が、五陵貴人の子弟の、豪奢を敍したるもの、流石は詩聖の作、誰乎一吟以て、壯美の感に打たれざらん、されどその餘韻、施いて我國富家の、子弟の頭上に落つる時、果して如何の感かある、測らざりき、今日、唐の詩人より、邦國青年を教訓せよとて、この一詩を得んとは

「さのみ富裕ならざるに、若様」と云はるゝが儘に、神聖なる労働を卑しむ、貴公子を氣取り、滔々として淫靡に流れ、世波に抵抗するの勇氣を失ひ、川柳子をして「賣家と唐様で書く三代目」との歎聲を發せしむるに至れるは、そも誰が罪ぞ、情も過ぐれば仇となる、世の父兄、舐犢の愛に溺るゝ勿れ

レの故鐵道王ハリマンは、四十年間に、拾數億の富を作り、その死せし時には、全米國の鐵道は、一齊に五分間、列車の運轉停止をなせし程の、聲望を有したる人なるが、彼の長子は如何に、大學卒業後、鐵道工夫

となりて線路に働き、或は機關車の火夫となりて油に塗れ、日夜劇しき労働に、従事し居たるが、昨日に變る今日、その父の歿して、大鐵道を經營するの重任の、雙肩にかゝり來るや、奮然起ちて、其の後を襲へり、曩日一勞夫として、成功せし彼は、今日亦幾多の大會社を統率して、遺憾なく其の辣腕を揮へり

如斯は、努力奮闘を生命とせる、米國に在りては、正に日々目撃する一例たる而已、親の蓄積したる端金をあてに、遊蕩三昧に身を持ち崩し、醉生夢死、活くことを知らざる邦家の子弟、ハリマンに對して、何の

顔色かある

46 世の父兄よ、労働によりて得る、有形の報酬のみに著目し、更に之が精神に及ぼす無形の感化の、偉大なることを忘るゝなかれ、安逸は意氣を沮喪せしめ、活動は潑刺たる生氣を養ふの原因ぞ

我國文明の先驅者福澤翁は、その修身要領の中に、「心身の獨立を全うし、自から其の身を尊重して、人たるの品位を辱めざるもの、之を獨立自尊の人と云ふ、自から勞して自から食ふは、人生獨立の本源なり、獨立自尊の人は、自勞自活の人たらざるべからず」と、

述べ、以て世の青少年を誡めたり

細川忠興の壁書に、物の成らぬ人を評して

夜遊びや朝寢晝寢に遊山すき

引込思案油斷不氣根

と、次に可憐なる米國の一少女の手になりし、「水夫の歌」を掲ぐ、篇中、横溢せる勇氣と、確固たる信仰の閃めき居るを見るにあらずや

4. In the noontide glare,
Oh! bright and fair
Is the wide expanse of ocean;
In the morn's first light
'Tis a glorious sight,
So full of life and motion.
 5. When the tempests sweep
The rolling deep,
And the angry billows swell,
I mind not the strife,
Which to me is rife
With thoughts that I can not tell.
 6. When life's voyage is o'er,
And I sail no more
On the ocean's troubled breast,
Safe anchored above,
In the haven of love,
May the sailor boy peacefully rest.
-

THE SAILOR BOY'S SONG.

WRITTEN BY A GIRL THIRTEEN YEARS OF AGE.

1. (") Oh! the sea, the sea
Is the place for me,
With its billows blue and bright;
I love its roar,
As it breaks on the shore,
And its danger to me is delight.
2. Oh! I love the wave,
And the sailor brave,
Who often meets his doom
On the ocean vast,
And sleeps his last
In a shell and coral tomb.
3. And, in the night,
The moon's soft light
Smiles sweetly on the foamy billow
And many a star,
As it twinkles afar,
Seems to rise from a watery pillow.

労働は神聖なり



我庵は青天井に地の蕤

月日をあかり風の手箒

紐育土地建物株式會社の、耕作課の農夫に一人の
文學博士ありき、彼は非凡の篤學者にして、螢雪多年
グリーキ、ラディンを研究して、先年プリンストン大
學より、文學博士の學位を授けられ、同大學より、招
聘して教授たらんことを請へり、されど、彼は之に應
ずるの色なく、曾て「何故、かかる勞役を捨て、大

學教授の名譽職に赴かれざるにや」と問はれしに對し、彼は莞爾として「余は、澄み渡る青き空を戴き、香ばしき大氣を呼吸し、小禽の音樂に和しつゝ、馬匹と共に、一心不亂に耕すほど、爽快なるはなく、常に神と共に棲む心地して、去るに忍びず」と云ひ、依然として農耕に従事せりき

今を去ること、凡八年前、紐育中央鐵道に便りて、紐育市の郊外に位置せる、コロニーアルハイツといふ、一邸宅公園 Residential park に遊ばんものと、タッカホー停車場に下車したる時、二頭立の馬車を、自ら馭

して、驛前に待てる、風采いやしからざる、一紳士あり、吾等夫妻を懇慫に迎へ、自ら案内の勞を乗りたり、計らざりき此の馭者こそ、多くの銀行會社を經營せる、タスカー氏その人ならんとは、自ら紹介せらるゝに及んで、其の身分に對し、其の態度の、餘りに平民的なるに、一驚を喫したりき

かくの如きは、米國の紳士間に、屢々見る所にし、内地に於ては、容易に見る能はざる所とす

55
ジョン ラスキン曰く「神は人の爲に最善の勞働を選ぶ、而してそれが各の爲に、善果を齎らすや否やは、

其の人の働きの如何にあり、各自は唯、感謝しつゝ、働
くあるのみ、之を疑ひ、之を怠りて、悪果の至るは、
自業自得而已」と、二宮尊徳の歌にも

天地の恵みつみおく無盡蔵

鍬で掘り出せ鎌で刈り取れ

人は神意を満足せしめ得て、始めて各自の満足を
得べく、誠心誠意を以て、己が心身の勞を、提供した
る場合には、神は必ず何等かの報酬を與ふるものなり
よし、汚く稼ぐとも清く暮せよ、時間を賣らずに
力を賣れ、此の世に於て何事をかを成さんと欲せば、

明日なる語を眼中にすべからず、過去に執着せず、未
來を待まず、ただ現在の己れのベストを竭すあるのみ
つとめてもまた勤めてもつとめても

勤めたらぬは務なりけり

孝
と
成
功





何をか孝といふ、曰く、親を喜ばしむることなり、
 親を思ふ心にまさる親心、子故に喜び、子故に泣く親
 を、子が喜ばしむるほど、容易なるはなし、於是乎更
 に曰はんとす、孝とは百行中、最も容易なるものなり
 と

明治天皇の御製に

獨立つ身となりし子を幼しと

思ふや親のこころなるらむ

親は、しかく、子を思ふものなれば、子のなせし
 些々たる親切も、こよなく、嬉しく感ずるものなり、
 子が家付の借金を、返済し呉れたりとて、その子の肖
 像を神棚に祀り、毎朝御初を供して拜し、若し人の問
 ふあれば、こは我家の守神なりとて、涙と共に喜び語
 る親さへあり

子を思ふ親ほど親を思ひなば

世にありがたき子とや云はれん

孟子に、「泰山を挾んで、以て北海を超えよと、人
 に語りて曰く、我れ能はずと、是れ誠に能はざるなり、

長者の爲に枝を折る、人に語りて曰く、我れ能はずと、
 是れ爲さざるなり、能はざるに非ざるなり」と、世に
 往々、孝行難を口にするものありと雖も、之れ能はざ
 るに非ずして、爲さざるなり

孝已に至易なりとせば、百行、先づ孝より始めざ
 るべからず、狄仁傑の「歸省」の詩に

幾度天涯望白雲 今朝歸省見雙親

春秋雖富朱顔在 歲月無憑白髮新

美味調羹呈玉筍 佳釀入饌餽冰鱗

人生百行無如孝 此志眷眷慕古人



あゝ樹静ならんとすれども、風止まず、子養はん
とすれども親待たず、昨日は人の身の上、今日は我身
の飛鳥川、行基菩薩の

山鳥のほろほろとなく聲きけば

父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ

孝したき身には親なし魂祭、今更に石に蒲團も着
せられず、の悔なきやう、常に心掛くべし、古歌に

父戀し母戀してふ幼子の

心を常に忘れずもがな

と教へたり、此の心こそ、やがて、孝となるものなれ

而して何をか成功と云ふ、曰く、人を喜ばしむる
ことなり、人はわが親の如くに、常に己れを思はず、
故に常に己れを思はざる人を、喜ばしむることは、常
に己れを思ふ親を、喜ばしむるが如く、しかく容易な
らざるべし、於是乎更に曰はんとす、成功は孝より難
しと

の苟くも、世の中にて、最も容易なる孝を、行ひ得
ざるものは、孝よりは更に難き成功は、断じて之を期
すべからず、孝は成功の始にして、成功は孝の終なり、
故に孝なくして、成功なるもの更にあることなし、知





孝と成功

るべし、成功の、獨り孝子の門のみに出づることを

故ジエ、イ、ピ、イ、モ、ー、ガ、ン、の、應、接、振

米國銀行王、故ジエイ、ピイ、モーガンは、紐育市
 金融市場の中央に、堂々たる事務所を構へ、泰西の金
 融界を、意の儘に左右したりき、嘗て一新聞記者、經
 濟上の所見を聞かんと欲して、モーガンの事務所に至
 り、取次の者に紹介の勞を求めたるに、取次の者之に
 應へて、「己れの用向にて來り、取次を煩はす要あらん
 や、モーガンは彼所に在り、自ら入りて面會を求めよ
 と

彼の記者、少時佇みて、聽て徐ろに、モーガンの机の側に進み寄り、いと慇懃に“Good morning sir”（お早う御座います）と挨拶せり、されどモーガンは、一瞥だに與へず、事務に餘念なかりければ、記者は重ねて、“Good morning Mr. Morgan.”（お早う御座います、モーガン様）と繰り返したるに、少時ありて、彼は悠然として、やゝ頭を擡げ、射るが如き眼光を記者に放ちつゝ、“How did you get in here.”（如何にして此所に入りしや）とあびせかけたり、是に於て記者は“Stepped in, sir”（歩み入りました）と答へたるに、モーガンは、“Step out.”

（歩み出でよ）と云ひ捨てたるまゝ、机に倚り仕事を續けて、また顧みざりしと、

蓋し、モーガンは、周到なる用意を以て、最もよく聞きたる人にして、その聞き終るや、斷乎として、

Yes (語) 若くば No (否) の唯一言を與ふるを以て常としたり、而かも一度 Yes と云ひ、No と答へたらんか、如何なる事情のありとも、頑としてその決意を、翻へしたることなかりき

「時は金なり」の俚諺の是非は、しばらくいはずもがな、少くとも光陰を虚しく費す、邦國人の應接振と



故ジエイ、ヒイ、モ一ガンの應接振

72

は、其の趣を異にせるを知るべし、昨日の紅顔は、今
日の白頭、寸陰も尙之を愛まざるべけんや
かへり花かへらぬものは月日かな。 白

カーネイギの光風霽月

十九世紀の科學の進歩につれ、父祖傳來の手工業
 は、機械工業の爲に奪はれ、家道日に窮り、一家を擧
 げて、遂に住み馴れし故國蘇格蘭を後に、海波千里の
 北米に移住したるは、正に彼が十歳の時なりき
 糸卷小僧として、一週一弗二十仙の給料を、享け
 たるを始に、工場に入りて、穴藏の汽罐火夫となり、
 電信配達夫となり、或は電信技師となり、其の間、正
 直、勤儉、克己を旨とし、有らゆる劇務に堪へ、寸陰

を利用して、修養に怠らざりければ、世の信用、益々
嵩み、遂には鐵橋會社を起すに至れり、爾來堅忍不拔
事に當りし程に、機會は機會を生み、幸福は幸福を産
み、日ならず、鋼鐵王として、大小無數の工場に、人
を役すること臆て五十萬、富を累ぬること無慮十數億
とはなれり

睦じき中もこのころうとうとし

隣りに庫を建て、からのち

彼が致富の策を立て、一心に財の蓄積をなせし
日、幾多の群小は、嘲笑の眼を以て彼を視、評して守

錢奴と呼べり、燕雀は鴻鵠の志を知らず、また鸚鵡の
鵬を笑ふと何ぞ擇ばん、西哲エマーソンは "To be great
is to be misunderstood." (偉人たりとは人に誤解せらるゝ
ことなり) といへり

千兩箱富士の山ほど積んだとて

冥土のみやげになりやすまい

果然、カーネイギは、手を翻へしたるが如く、致
富のことを止め、如何にして最も有効に、此の財を散
ずべきやに就き、多くの人才を聘して、之が研究をな
さしめ、廣く洋の東西に懸賞募集して、策を索めつゝ、

幾多の公共事業、慈惠事業に、富を頒つに日も尙足ら
ざるが如し、彼や、誠に富者の使命を自覺したる人と
いふべく、偉人の心事、光風の如く霽月の如し
繁榮は逆運よりも、人の徳を試めす一層殿しき試
験なり、西諺に曰く「最後に笑ふものが最も上手に笑
ふもの也」

He who laughs last laughs best.

鐵齋畫伯の詩

人笑^ひ吾書癖^{しよへやぢりふ}

恰如^{あたかも}南面王^{なんめんわう}

吾耽^{われは}讀書樂^{しよのたのしみ}

萬卷享^{まんぐわんてん}天爵^{てんしやく}

當代の畫家、富岡鐵齋翁の近仕なり、翁、齡正に八十、矯々として塵を出で、假へば雲中の白鶴の如し、何ぞ其の意氣の旺盛なる、また何ぞ其の趣味の崇高なる

「四十五は鼻垂れ小僧、男盛りは眞八十」とは、石塚左玄の作なりとか、先年この都々逸を耳にし、樂

隱居若隱居多き邦國には、稍應はしからぬ言草なりと、感ぜしことありしが、最近鐵齋翁の詩を得、またその近況を聞き、不勢、我意を強くすることを得たり

邦人は、動もすれば、此の世へ活きに來たるものなることを忘れ、些細の端金を獲れば、忽ち口實を設けて、隱遁せんと企つるが一般の習なるに、老の至るを忘れて、己が天職にいそしめる、翁の如きは、正に活ける世の鑑ならずや

趣味は須らく高尚なるべし、交る友を見て其の人の人格を知る」とは、周く人の知る所なり、職務の餘

暇、古今の聖賢偉哲と相携へて、芝蘭の室に入る、世に讀書ほど、廉價にして、且つ有益なる樂はなかるべく、この樂みを知らざる者ほど、不憫なる者も亦なかるべし

鐵齋畫伯の畫が、殆んど天下一品として、何人も學び得難き、一種の氣品を存することは、蓋し伯の人格の背景に因るもの乎、人格、人格は實に畫龍の眼睛なり

凡河内躬恒が、山の法師の許へ遣はしける歌に
世を捨て、山に入る人山にても

猶憂なほき時は何地いづち行くらむ

と、楚その葉公しやこう、嘗かつて子路しろうに、孔子こうしのことを問ふ、子路しろう對こたへず、後日ごじつ、孔子こうしその對こたへざりしことを聞き惜せむみて

其その爲ひび人也なり、發憤ふんをばつしてしよくをすれ忘食をわすれ、樂たのしみ以もつて忘憂をわすれ、

不知おのれ老之將至いたらんとするを知らず

何ぞ是を以て、葉公しやこうに對へざりしや、と

コネデ、カト沿岸の魚釣會

イェール大學の位置せる、ニユウヘイヴンを距る、
 程遠からぬ海濱に、ブランフォードと名づくる一小都
 邑あり、大西洋に面す、巍峨たる岩壁に老松を列ね、
 蜿々として遠く海上に臨み、翠色煙波と相映ずる所、
 恰も一幅の畫圖、而して此所に住める人、紳士に非ざ
 れば淑女なり、温乎たる其の容に接し、霽然たる其の
 言を聞くもの、誰乎油然として欽慕の情を起さざる、
 蓋し是れ、自然の佳景に育成せられたるものか

今を去ること十有餘年、ブルックリン・インスティテュウト図書館長たる、ハッチンソン嬢に、招かれて、二週日此所に暑を避けたり、折しも日露干戈を交へたる時、さなきだに邦人相遇すること厚き米人は、一入心を用ひて、今日も明日もと、町民を舉げて、爰に歡迎の催しは行はれぬ、或日のこと、同地出身の、ヴァッサ女子大學生十八名よりなる魚釣會は、企てられたり

灣は恰も弦月の状をなし、翠山を後に、滄波を前に、無數の怪松斷崖に懸り、千仞の絶壁深淵に臨む、涼風

習々として、夏を忘るゝ海上に、一隻の輕舸を泛べ、嬉々として綸を投ずるは、雪白洋装の佳人十八名と、一名の敷島男子なり

其の日、最も多く釣りたるものに、懸賞あり、いで我も亦日本男兒なり、異郷に出でて、異郷の女子に敗をとりてはと、心を彌猛にはやらせつ、十八名と共に竿を垂れたるなり、餌を奪らるれば、競ひて、余が爲に之を付け呉れたれば、自ら手を下す要もなく、愉快に時の移るを忘れたり、釣るゝは、ブリユウ・フィッシュとして、長さ五六吋ばかりの魚なり、聽て日も

西に傾く比、幸にも七尾を獲、當日の月桂冠は、遂に
我手に落ちたり

意氣揚々、晚餐の卓を圍み、得意満面、この日の
物語に花を咲かせし時、女學生の一人、不圖、口をす
べらして、"As expected" (望みし通り) と云へり、聞き
て不審に思ひ、隣席に坐せしものに、その意を糺せば、
「されば、吾々仲間同志、前日申合せて、遠來の珍客に、
今日の勝を得させんものと、下相談し居たるに、豫期
せし通りに成りたるを喜べるなり」と

人を喜ばしめ、その喜ぶを見て喜ばんとする、氣

高き計らひなりしなり、さるにしても、己が修養の低
かりしことよ、背汗の思をなし、匆々行李をと、のへ、
急遽此所を辭し、歸途に就けり、爾來何年、幾度の招
待にも、未だ再び、慚ぢて彼の地に得行かず

恥を知れ恥を知らねば恥をかく

恥に過ぎたる恥はあらしな

心の快こころび



世の中の人知らねど科あれば

我身を責むるわが心かな

⑦ 肉體の快樂は、直ちに以て、眞の快樂といひ得る
乎、設し口に美味を食ひ、身に錦繡を纏ふとも、科あ
りて、何の快かある」自ら反して縮からば、千萬人と
雖も、吾往かん、快樂の根元、亦心に在りと知るべし

Peace does not dwell in outward things,

but within the soul.

FRANÇOIS DE LA MOTHE FENELON.

鹿を追ふ獵師は山を見ず、肉體の快樂をのみ追ふに、之れ急なるものは、靈性の快樂を味ふこと能はず。隴を得て蜀を望むが、世の常なれば、安樂は之を何程求め得とも、遂に底止する所を知らざらん、古歌にも

世の中は駕籠に乗る人擔ぐ人

尻のいたさに肩の痛さよ

○ 色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、とは

般若心經にある言葉なり、夢、肉慾の奴隸たること勿れ、肉體の樂みは、心神の苦み、心の快びを措いて、

眞の喜なるものあることなし

・ 心こそ心まよはす心なれ

心にこころ心ゆるすな

而して心の快びとは何ぞや、人を喜ばせて、其の喜ぶを見て快ぶことなり、是れ即ち心の欲する心の快びなり、心の欲する心の快びを得んとせば、須く己が肉體を犠牲と爲さざるべからず、句に

手折らるゝ人に薫るや梅の花

人を喜ばすことの祕訣は、己が肉體を犠牲とするに在りて、凡人の最も難しとする所なり、但し、修養

を積みたる人は、之が爲、何等の痛苦を感じざるのみならず、却て心身活躍して、不尠爽快を覺ゆるものなり、孔子の言に

志士仁人、無求_レ生_レ以_レ害_レ仁、有_レ殺_レ身_レ以_レ成_レ仁

と

蓋し修養とは、己が肉體を犠牲とする際に、覺ゆる苦痛を、變じて快樂と化せしむることなりと、謂ひ得ん乎

グリヴス曰く

Strive to realize a state of inward happiness

independent of circumstances.

奴隸と奴隸

100



心の快び

北米合衆國十六代の大統領、リンコーンは、千八百六十三年の元旦、黒奴解放の宣言を發して、奴隸を廢止したりき、「石川や濱の眞砂はつくりとも、世に盜人の種はつきまじ」と、辭世を遺したる盜人もありしか、リンコーンによりて、黒人の奴隸は、廢されたるも、世に意志の奴隸はつきざるべし

思ふ、言ふ、行ふ、三者一致するものを、大丈夫と云ひ、然らざるものを、懦夫と稱す、思ふ儘を言ひ

得ざるものも、言ふ儘を行ふ能はざるものも、凡べて奴隸なり

世評を恐れて、己れの言はんと欲する所を、言ひ得ざるものは、世評の奴隸なり、利害の爲に、己れが行はんと欲する所を、行ひ能はざるものは、利害の奴隸なり、金錢の爲に、己れの良心に反したる言行を爲すものは、金錢の奴隸なり

誘惑と知りつゝ、之に克つ能はざるものは、性慾の奴隸なり、位置の爲に、言行を左右するものは、位置の奴隸なり、曲學阿世は、功名心の奴隸にして、虚

榮の爲に、己れの能はざることを、正直にいひ得ざるもの 即ち "Can not afford" と、敢ていふことをなさざるものは、虚榮心の奴隸なり

太閤秀吉、黒田如水に問ひて、「天下何物乎最も多き」と、應へて曰く、「人なり」、秀吉更に問ひて、「天下何物乎最も少き」と、答へて曰く、「人なり」と、甚だ面白き問答ならずや、完全に意志の獨立せるものを、眞の人となす

著者の敬愛する、世の人よ、奴隸となる勿れ、而して奴隸たれ、目のあたりの己れの義務の奴隸たれ、

其の最も忠實なる婢僕たれ、己れの義務は、天の命なり、
神の心なり

エマソン曰く

So nigh is grandeur to our dust,

So near is God to man,

When Duty whispers low, Thou must,

The youth replies, I can.

意志の獨立

己れの意志全く獨立して、始めて釋迦の所謂「天
上天下唯我獨尊」基督の「神は爾の内に宿る」の境涯
を味ひ得べく、神を恐れて、人を怖れざるに至るを得
べし

意志の獨立を期せんと欲せば、肉體の要する衣食
住の獨立を期せざるべからず、衣食住は金錢を要す、
諺にも「衣食足而知禮節」金錢天下を左右す」或は、
「黄金の前には帝王も脱帽す」と、蓋し金錢なくしては、

衣食住し得ず、衣食住なくしては、生存し得ざるが故乎、宜なる哉、西哲は「輕忽の念を以て、金錢の問題を論ずる勿れ、金錢は品格なり」と言へり

金錢の重要なること、既にかくの如しと雖も、金錢は之を掌中にすべきものにして、心中にすべきものに非ず、而して金錢を心中にせざる唯一の方法は、之を掌中にするに在り

衣食住に要する金錢を、掌中にせざるものは、多くの場合に於て、之を心中にするの虞あり、金錢一たび心中に入らんか、倏ち金錢の奴隸と化すべし

孔夫子曰く、「舟、水にあらざれば行かず、水、舟に入らば、即ち舟を没す」と、蓋し意志、金錢に非ざれば獨立せず、金錢、意志に入らば、即ち意志を没すの謂乎、人は黄金を役すべく、而して黄金に役せらるべからず、佛蘭西の諺に

Money is a good servant, but a bad master.

亡國の兆



羅馬の亡びたる時、市中に八百有餘の溫泉場を存したりと、知らず邦國ほど狹隘なる領土に、多くの湯治場を有する國あるを、鐵道、電車軌道、多くは溫泉場と遊園地とを連絡して、遊客を待つ、亡國の兆、其の一なり

酒を交際の要具と心得、之が爲に多くの時間と能力とを浪費す、亡國の兆、其の二なり
相互に時間を重んずる觀念、更になく、我も人も

亡國の兆

有耶無耶に、虚しく光陰を費す、亡國の兆、其の三なり

銀行會社員を視るに、夏は扇、團扇を手にし、冬は手を火鉢にす、知らず何れの手を以て、働かんとするにや、喫煙と雑談との隙に、仕事に従ふ、亡國の兆、其の四なり

領土狹隘にして、人口劇増するにも拘らず、國民の墳墓の地を去つて、海外に出でんとするもの、甚だ多からず、依然として蝸牛角上に、輸贏を争ふ、亡國の兆、其の五なり

西洋間と、日本間とを兼ねたる家屋に住し、洋服を著し、和服を用ひ、靴を穿ち、下駄を履く、亡國の兆、其の六なり

會社商店は、顧客を忘れ、學校は、生徒を忘れ、官廳は、國民を忘れ、何れも己れを本位として事に當る、亡國の兆、其の七なり

尠からざる學資を費して、高等教育を享け、社會に出でて、己れに應はしき職業なしなど、とり止もなき理由の下に、神聖なる労働を避けんと欲し、徒に聲をなして、就職難を託つ、亡國の兆、其の八なり

企業家が、企業に對する親切と熱心とを有せずして、眼前の小利に眼を眩し、國家百年の長計を誤る、亡國の兆、其の九なり

歐米人の海外に出づるや、先づ墳墓を作りて、後徐ろに業に従事するを常とするに、偶々海外にある、我同胞の一舉一動、殆んど腰掛的ならざるはなし、亡國の兆、其の十なり

娛樂としいへば、室を密閉して、空氣の流通を絶ち、身體の下部を壓迫して、血液の循環を止め、脂煙草を燻べながら、睡眠の時刻をも忘れて、圍碁、將棋、

骨牌其他賭博的遊戲に耽る、亡國の兆、其の十一なり

海外の事情に營きものが、動もすれば、何國の排日などと、東洋獨特の排外思想を、臆面もなく、廣言し、其の禍の却て、邦國に及ぶを知らず、亡國の兆、其の十二なり

師は三世の誓ひなどの誠もあるに、幼少の頃、受けたる師の恩を忘れ、報恩反始の徳義に悖る、亡國の兆、其の十三なり

舉りて、依頼心、嫉妬心、猜疑心の奴隸となる、

三
景
佳

亡國の兆、其の十四なり

依頼心、嫉妬心、猜疑心、之を三根性と云ふ、世

に此の三根性を有するほど、恐るべきものはなし

堂々たる學校出身者が、長年月の間、慈親と恩師
 とより、養育と教育とを受け乍ら、其の社會に出でん
 とするに當り、己が就職の道の手數迄も、尙父兄及先
 輩を煩さんとする、自助の精神の、人生に於て如何に大
 切なるかを知らず、飽迄も人に頼らんとする、所謂据
 膳的處世法を望む、是れ依頼根性なり

124 かくの如きは、單に其の一例に過ぎず、有らゆる階級を通じて、有らゆる方面に於て、有らゆる形式にて、有らゆる依頼心を發揮せり、就中、官尊民卑の弊を託ちつゝ、尙經濟界の活動を、政府の財政方針に俟つが如きは、依頼心の完全に發展せる證左に非ずして何ぞ

向後、大に海外發展に俟たざるべからざる、運命に逢著せる邦人は、この依頼心を撲滅せずして、果して海外何れの地にか、自家の立場を發見せんとはする、國內にあると同じ筆法を以て、海外の政府に俟たんと

する歟、余は爰に、孟子が齊の宣王に曰ひたる所を以て、其の蒙を啓かん、曰く、「かくの如きは、木に縁りて、魚を求むるより、甚しきあり、木に縁りて魚を求むるは、魚を得ずと雖も、後の災なし、若かく欲する所を求むるは、心力を盡して之を爲して、後に必ず災あらん」と

憎むとも憎みかへすな何時迄も

憎み憎まれ果しなれば

125 し、凡そ邦人ほど、嫉妬心を有する國民は、非ざるべし、その内地にあると、海外にあるとを問はず 特に

誰か、水平線上に、頭角を顯はさんとするものあらんか、教育家といはず、宗教家といはず、軍人といはず政治家といはず、實業家は固より、官吏、學生々徒、さては職無き天下の浪人に至るまで、己れを忘れて、私に根據なき中傷を捏造し、水平線下に引下さんと謀る、然るに之を歐米人に見よ、彼等は同僚中、拔群の輩を見出さんか、相携へて、陰に陽に之を援け、聽て共に向上を企つるに非ずや、之れ前者の甚だ振はざるに反して、後者が世界到る所に發展せる所以なり、**此を杖は打たる**とは、邦國の辭典にのみ見る諺乎

If others vex you by their words or deeds, or whatever happens to you that causes you distress or pain, it will all help to fit you for a noble and blessed state.

JOHANN FAULER.

有史以來、一小島内に蟄居して、相互に鬢の毛を牽き合ふことを、これ努め、端なくも猜疑心の増長、その極に達し、國內は全くこの根性の、競馬場裡の如き觀を呈するに至れり

邦國の發展を阻止する、本能寺の敵、甚だ妙からずと雖も、未だ嘗て、其の恐るべきこと、如上の三根

性の如きものあるを見ず、世の識者よ、希くば、之が打破に全力を注ぎ、以て國民修養の、焦眉の急を忽がせにせざらんことを

明治天皇の御製に

あさみどりすみわたりたる大空の

ひろきを己が心ともがな

最も有効なる健康法

散步、水泳、體操、遊戲、擊劍、柔道、庭球、野
 球、角力、漕艇の運動を始とし、冷水摩擦、腹式呼吸、
 田園生活に至る迄、數へ來れば、健康法の種類また甚
 だ尠しとせず

然れども、これ等の健康法の總べてを行ひたるよ
 りも、更に一層有力なる健康法のあるを忘るべからず
 そは如何なる時にも、如何なる所にも、如何なる事
 ありとも、恰かも怒濤の中に立てる盤石の如くに、泰

最も有効なる健康法

然として、内に麗日駘蕩たる平和を保つことは是なり、
マーク アントニイは

Be like the promontory, against which the waves continually
break; but it stands firm, and tames the fury of the water
around it.

絶えず逆襲する怒濤を人生とすれば、中に立てる
盤石は人なり、狂瀾天に朝して、巨巖を搏ち、波は碎
けて雪と散る、見るべし、外界の轟々たるに似ず、か
の巖の中心には、不斷完全なる平和の、維持せらるゝ
を、また激浪に磨砕せられて巖角の益々圓滿となるを

Do not lose your inward peace for anything whatsoever,
even if your whole world seems upset.

ST. FRANCIS DE SALES.

寺院と動物園



鄙ほろに都みやこに、到いたる處、倭屋わゑの累かさね々たる中に、巍たか然たかと
 して獨ひとり聳たつゆるは、寺院じやういんに非あらずや、到いたり參拜さんぱいするに、
 殆たいていんど何なにれも羅漢らかんの祭まつりられあるを見る、若しし夫それれ、試たま
 みに、全國の寺院に安置あんじせらるゝ、羅漢の數を計かへん
 か、決して、百千の少數せうすうにはあらざるべし、而してこ
 こに、更に驚おどろくべきは、各戸かくこに、米食まいじきふ羅漢らかん即すなはち働はたらら
 かん、の、蔓延まんえんしつゝあることなり、先見せんけんの明あきある父兄ふじやう
 は、往々むぎむぎ此の羅漢を勸堂くわんどうに祀まつれるもあり

借問す、働らかなの羅漢、卿等は此の世に於て、
 働らくことを欲せず、彼の世に於て、働かんと欲する
 耶、安息は死して後得らるゝもの、寧ろ此の世に於て
 は、働らくといふ樂を、味はんとは欲せずや、カーラ
 イル曰く

Whatsoever thy hand findeth to do, do it with all thy might.

人、或は國內に、動物園の見るべきものなしと、
 さりとは甚だ見聞の狭きこと哉、見よ、我國には到る
 處、珍禽奇獸を飼養せるに非ずや、鳥には借金鳥あり、
 掛鳥あり、貝に厄介あり、魚に酒のみ鯛あり、獸には、

のろ馬、どん馬を始とし、最も多く繁殖せるを怠けも
 のとす

憂國の士、冀くば先づ、羅漢となまけもの退治
 をなせ、畏くも

△明治天皇の御製に

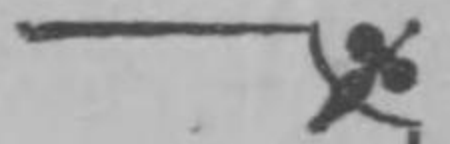
としどしに思ひやれども山水を

くみて遊ばむ夏なかりけり

とあり

阪神電車の揭示

140



寺院と動物園

神戸商業學校に通ひし頃、夏休みを利用して、上海、蘇州、杭州に旅行したるに、上海在留の外國人によりて、經營されたる揚子江沿岸の、さる小遊園地の出入口に、次の如き揭示あるを見て、不審を感じたることありき

支那人ト犬トハ出入ヲ禁ズ

自國の一都市の中央に、外人によりて、かかる告示を掲げられて平然たる支那人、之を掲げて平然たる

外国人、共に其の度胸に驚かざるを得ざりき

數年前、七年振にて、米國より歸朝し、始めて阪神電車に乗りたる時、正に左の如き掲示を目撃して、其の掲示が、同胞の手によりてなされたることを知り、端なくも十有餘年前、上海にて視たるそれを想ひ起さざるを得ざりき

流石は場所柄とて、外人の乗客も多からんと、豫期したるもの乎、さりとしてこの掲示によりて、兩者文明の程度を暗示せるものに非ざる歟、聊か異様の感なき能はず

NO SMOKING

た	た	た	た
ば	ん	ん	ん
こ	つ	つ	つ
	ば	ば	ば
の	は	は	は
む	く	く	く
こ	こ	こ	こ
と	と	と	と
	だ	だ	だ
	ぬ	ぬ	ぬ
	ぐ	ぐ	ぐ
	こ	こ	こ
	と	と	と
	だ	だ	だ
	す	す	す
	こ	こ	こ
	と	と	と

右堅く御断り申上候

先づ、東洋文明の木鐸

を以て自任せる同胞の、かくの如き掲示をなしたることに、一驚し、屢々乗合ふにつれて、其の必要を認め、再驚し、爾來四年を経たる今日、一等國民なりと自負しつゝ、尙この掲示のあるを見ては、更に三驚を喫したり、寒心の至りにこそ

然るに、内地に在りては、この掲示によりて見らるゝが如く、英語を話す國民と、邦人との間に、文明の程度の差あることを認識し乍ら、一步海外に踏み出せば、常に「我れは神國男兒なり」との自負心を貫かんとする同胞なしとせず、矛盾の極ならずや

善惡の人を見る目はありながら

わが身の上は烏玉のやみ

外人に向つて神國男兒なりとの自負を、口又は素振りに表はすは、恰も支那人が、中華を以て自ら誇りとするに同じ、我れの見て快からず感ずるが如くに、

彼れの聞きても、亦怪げに感ずるならん

桃李不言 下自成蹊

神州男兒、宜しく、自ら之を口になさず、唯躬行以て、外人をして自ら之を認めしむべし、行の伴はざる言を、妄に口にし、或は鼻にかくるは、神州男兒の本領に非ざるべし

華嚴の瀧と一粒の米

148



阪神電車の掲示

4

取締役監查役

◎ 盲目の模範村長、愛媛縣温泉郡余土村の人、森恒太郎氏は、曾ては少壯政治家として、望を將來に囑せられし人なるが、不幸にも、明治二十七年九月の頃より、悪性の眼疾に罹りしかば、尠からざる費用を投じ、百方治術を施したりしも、甲斐なく遂に失明の人となれり、時に老母と兩兒の家に在るあり、徒に我身の生き長らふるは、彼等三人を死地に導くもの、折もあらば自殺せんと、意を決したること一再ならざりし

ある日のこと、慈母の薦むる食膳に向ひ、今日こそは、豫ての覺悟を果さんものと、懷劔を坐下にし、ばせ、何氣なく装ひつゝ、食事もそこそこに、聽ていざさらばといふ刹那、一粒の飯の、指頭に觸るゝあり、何心なく拾ひ上げて揉み潰しつゝ、不圖幼少の比、兩親が、食膳に向へば一禮せよ、一粒の飯も決して粗末にするな、と教へられたるに想ひ到り、この一粒、何故に、かく迄も、尊重せらるゝにやと、自問自答、つひに豁然として悟る所あり

「さなり、この一粒には無量の意味を含む、彼の

一粒の米が、生産を増大し、子孫を繁殖せんが爲には、水旱風雨の苦も、病菌害虫の難をも辭せざる而已かは、向上發展して、人と同化せんが爲には、摺られて衣を脱ぎ、春かれて皮を剥ぎ、身を焦熱の釜中に投ぜらるるをも敢て厭はず、遂には食まれて消化され、全く身を滅盡して一生を終る、あゝ米や尙ぶべし、身を犠牲として、その使命を全うす、我れ今、萬物の靈長たる人に生れ、僅に盲目の故を以て、虚しく身を捨てんとす、あゝ過てり、かくては一粒の米にだも及ばず」と、今更の如く、驚くと共に、全身の血は沸き、

始めて日光を見るの心地して、いで此の世のために、
 此の身を犠牲にせんと、大悟徹底、爾來唯々愉快を感
 じつゝ、盲目の不自由を忘れて、東奔西走、自治發達
 の爲に、席の暖まる暇なく、居村の長に擧げられては、
 之が改善經營、其の宜しきを得、遂に今日の名聲を博
 するに至りしと

明治天皇の御製に

おのが身をかへりみずして人の爲

盡くすや人の務なるらむ

此の世をば、思ふまゝにならぬ浮世と誤解して、

厭世的自暴自棄となり、輕卒にも、淺墓にも、華嚴の
 瀧、淺間の噴火口に飛込みたるもの、飛込む迄の勇氣
 なきも、尙それ以上の厭世家の、我青年間にあるは、
 歎すべきの至りならずや、彼等宜しく、森村長の話を
 味ふて可なり、句に

蒲公英や幾日踏まれて今日の花 彫卯

初

夢

156



華嚴の海と一粒の米

甲山の眺望を後に、茅海の佳景を前に、鬱々たる
 千古の森を以て周圍し、泉石の排置をして更に一段の
 趣を添へしめたる庭内に、去年の暮よりふり撒かれた
 る砂上の、箒目もいと正しく、人をして悚然たらしむ、
 之を西宮神社の境内の元旦とす、破顔一笑、社頭に顯
 はれたるは、即ち戎の神なり、余を迎へて語るやう
 卿は頃日、阪神の間に別邸を索むとか、十日戎も迫れ
 る今日、余は衆生の諸願を耳にすることの、五月蠅け

れば、幸ひ、卿に之を譲らん」と

余は「社の位置、眺望共に佳にして、庭園の風致も捨て難けれども、ただ余が此所に居住を移さんには、家屋につきて二ヶの望あり、一には余は至つて寒むがりなれば、各室に暖房の設けを施すこと、二には社前の賽銭箱の上に、大聲蓄音器の喇叭口を具へ、管を長くし、奥の一室より、數名の書記をして、善男善女が、一錢二錢を投じて、「家内安全五穀豊穰」「商賣繁昌相場必勝」「世上物騒我身息災」と口に任せての放言を、書取らしめ、之に各、其の顔色、住所、氏名、年齢、職

業を添付し、印刷に附して、世に公にせんとす」と

我、手を拍ちて「面白き考案なり、早速造作にかからん」と

折ふし、若水汲む井戸車の音に、不圖も、わが夢は破られたり、古歌に

祈りてもしるしなきこそ驗なれ

禱るこころに誠なければ

嗟ならざれば通れぬ關所



勸進帳の辨慶が、安宅の關所を越えし昔は去りたれども、大正の今日に於ても、尙繁文縟禮形式の關所てふものありて、嘘を以てなさざれば、通關を許されず、世にこの關所を、難なく切抜くる法を、會得したる人を、或は俗に古狸とも評すれど、一般には之を世故に長けたる人と稱し、後進者より少なからざる尊敬を拂はるゝ「先輩」とす

試みに、其の通關手續の一二を例證せんか、官公

嘘ならざれば通れぬ關所

署は固より、學校に奉職するもの、若し已むを得ずして、缺勤をなさんと欲せば、正に左の如くにして届出づべし

缺勤御届

私儀本日病氣ニ付缺勤仕候間此段御届申上候也

年月日

職氏名 ㊟

長殿

決して「妻の病氣看護の爲」とか「悴出發見送の爲」とか「知己送葬の爲」とか「婚禮の爲」などと、

事實を具申せざることなり、若し正直に事實を記さん乎、關守忽ち通關を拒止すべし、かかる場合は、假病に限るとせられたること、其の一なり

官公署、學校に於て、必需品を买入る、時、假に三個壹圓の物ありたりとせんか、一個の單價は參拾參錢參厘參參、なり、正直にかかる領收證を提出せん乎、會計係に叱らるゝべし、宜しく三個壹圓貳錢、單價參拾四錢と書かざるべからず、甚しきは、滑稽にも來賓に供したる茶菓代を、油代或は炭代と稱して、之を請求すること、其の二なり

嘘ならざれば通れぬ關所

監督官が、財産調べに来れる時、帳簿上に、五脚とある机の、四脚よりなき場合には、其の内一脚を態破壊して、完全なるもの三脚、破損二脚而して計五脚と答へざるべからざること、其の三なり

要は凡べて、不便不備極まる、法文規定に拘泥し、あらゆる嘘を工夫捏造して、之を上申し、殊更に事實を曲げて記帳し置き、揚句に、不肖在職何年さしたる失策もなく云々、と鼻高々に麗々しく挨拶を述べて、己が經驗を誇る人なきにしもあらず、古今集に
偽のなき世なりせばいかばかり

人の言の葉うれしからまし

さりとして、兒童に、夢にも嘘を吐く勿れと、常に訓戒せる教師、世の革正を以て自任せる官途の仁士、御都合の如何によりては、嘘も亦方便として、自ら許して、敢て顧みるの要なしとする乎

嘘ならざれば通れぬ關所